

「ルーマニア社会主義」 新免光比呂（国立民族学博物館准教授）

(1) 1983年 絶望と諦観と 2019年8月3日刊行

ルーマニアを初めて訪れたのは1983年夏。世界的宗教学者エリアーデの母国ルーマニアの宗教への関心からだった。しかし、そこにあったのは、チャウシェスク独裁下での人びとの絶望と諦観だった。

ルーマニアとの出会いは、パリから乗り継いだブカレスト行き列車のなかですでに始まっていた。ウィーンから2人のルーマニア人男性が車室に乗り込んできたのだ。

まだルーマニア語のわからない私は、英語とドイツ語でたどたどしい会話を始めた。彼らはウィーンでの国際会議に出席していた神学者と数学者だという。話が弾むにつれ、生々しく語られたルーマニアの政治的状況は想像以上に厳しかった。秘密警察の監視の目がいたるところで光っている、それも普通の市民の姿で当局へ通報するのだという。出会う人を信用してはいけないと。

列車は深夜の国境を越え、トランシルヴァニアをひた走る。やがて列車が駅に近づくと、神学者は先に降りるといふ。霧に包まれたホームにはレインコートの長い髪の女性が佇んでいる。私たちに別れを告げた彼がホームに降り立つと、女性が駆け寄って彼の腕のなかに飛び込んだ。

初めてのルーマニア滞在はロマンチックな情景で幕を挙げた。



チャウシェスク大統領が国民の血と引き換えに建設した大宮殿＝ルーマニア・ブカレストで2007年、筆者撮影

(2) ブカレストでの夏季講座 2019年8月10日刊行

社会主義体制下のルーマニアで宗教は困難な立場にあった。国民的宗教であるルーマニア正教会は民族主義と関わりが深く、政府に協力する姿勢を示す限り、ある程度の自由が認められていた。だが、他の宗派は厳しく管理あるいは弾圧されていた。

こうした状況下で、宗教研究などできるはずもない。そこで、フォークロア（民俗）研究へと方向を変えた。そのためにはルーマニア語が必須である。宿舎と食事付きの大学での1カ月の語学研修は願ってもない機会だった。

ブカレストの夏は暑かった。朝食をとる食堂は強烈な光が早朝から差し込む。授業の教室には風もなく、午後に向かって温度はうなぎのぼり。朦朧とした意識のなかでルーマニア語による講義が続く。

幸い、昼食の後はシエスタ（昼寝）の時間である。夕方までゆっくりと過ごせる。日差しが暑い街へ出る。都市改造の工事で埃にまみれたブカレストは散歩には適さない。だが、街の中心には美しいチシミジウ公園が広がっていた。そして少し足を伸ばすと野外民族博物館のある広大なヘラストラウ公園で市民がくつろいでいた。

講座参加者に対する監視に不安を覚えながらも、やがて友人もできた。そこで、ようやく貧困と抑圧のなかでも文化的な市民生活が保たれていることを知るようになる。



ニクソンがチャウシェスクにプレゼントしたインターコンチネンタルホテル＝ルーマニア・ブカレストで2007年、筆者撮影

(3) クルージュでの夏期講座 2019年8月17日刊行

宗教ではなくフォークロア（民俗）を研究すると決めたはいいが、ルーマニア語の習得はなかなか思うようにはいかない。三度目の夏期語学講座は、トランシルバニアの中心都市クルージュで参加することにした。

クルージュはハンガリー人が数多く暮らす街である。そもそもコロジュバールというハンガリー名もある。そこでルーマニア社会主義体制下での民族問題を知った。トランシルバニアでのハンガリー文化の抑圧である。社会主義思想は民族の分断を超えて労働者という階級で国際的に連帯するのではなかったか。

しかし、社会主義体制というものが、実際には強烈に民族主義的色彩をもつことを知る。ワルシャワ条約軍がチェコスロバキアの人びとを戦車で粉砕した1968年チェコ事件に不参加を表明したチャウシェスクは、社会主義体制の分断を期待する西側諸国にとって願ったりかなったりだった。だが、それはクールな政治的判断であると同時に、ルーマニア人の反ロシアという民族感情を国内統一に利用した民族主義的政策の一端でもあったのだ。

ルーマニア人の統一を図る一方で、チャウシェスクは少数民族の抑圧政策を進めた。ハンガリー語の教育機関が廃止され、言語的同化が進められていたのだ。



ハンガリー系の村の日曜日＝ルーマニア・トランシルバニアで1995年、筆者撮影

(4) 1989年、民主革命 2019年8月24日刊行

1989年の冬、世界は緊張につつまれた。ティミショアラというルーマニア西部の町で、市民が虐殺されたというニュースが流れたのだ。

すでにハンガリーとオーストリア国境に東ドイツ市民が押しかけ、ベルリンの壁が開かれ、プラハではビロード革命が起きていた。しかし、ルーマニアは変わらないだろうと多くの人が思っていた。

だが事態は急変する。例のごとく動員をかけて何万もの市民を共産党本部前の広場に集めたチャウシェスクが演説を始めると、やがて広場はブーイングに満たされた。テレビカメラはひきつる表情の大統領をとらえていた。まもなく大統領一家をのせたヘリコプターが共産党本部を飛び立った。そして数日後、チャウシェスク夫妻は捕らえられ、処刑された。

待ちに待った解放の瞬間であったが、同時にさまざまな疑惑が生まれた。政権ナンバー2であったイリエスクが大統領となったことからソ連によるシナリオがあったのではないかなど。そのため革命はやがて「盗まれた革命」とさえ呼ばれる。

それでも自由化は自由化であった。だが、同時にそれは競争の自由、そして失業の自由でもあった。

革命後まもなく、チャウシェスク元大統領の墓前には人があつまり、失業なき社会主義時代を郷愁をもって振り返るようになった。



独裁者チャウシェスクの墓＝ルーマニア・ブカレストで2011年、筆者撮影

チャウシェスク独裁体制はついに倒れた。ソ連もゴルバチョフのもとで解体した。旧ユーゴスラビアでは、民族、宗教が絡んだ戦争が始まった。筆者のフィールドワークは、そうした時代を背景としていた。

現地の民俗学者の紹介でマラムレシュ地方の小さな村に住みこむことになった。木造家屋が緑のなかに点在し、通りに面しては立派な木造門が並び、村はずれの丘には古い木造教会がある美しい村だった。

休日の村の路上での村人総出の散歩、結婚式、葬式、教会での礼拝、共同の蒸留所で作った各家庭ご自慢の蒸留酒（ツイカ）、水車小屋と水流を利用した洗濯場など、やがて日本のテレビ番組でも何度となく取りあげられる風俗習慣の中にどっぷりとつかった日々であった。

ただ、この村も桃源郷ではなく、現代社会のなかに生きてきた。ルーマニアで主流であるルーマニア正教会とギリシア・カトリック（17世紀に正教会からカトリックに改宗した人びと）との対立、集団農場解体にまつわるいざこざ、伝統的宗教と福音派セクトとの対立、社会インフラの不備など現実は厳しい。そして町で暮らす子供たちに忘れられたかのような孤独な老人たちと彼らの貧困に胸をつかれた。



調査した村の古い木造教会＝ルーマニア・マラムレシュで1995年、筆者撮影